

國學院大學學術情報リポジトリ

朱熹の跋文における「感情」の表象

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): 朱熹, 跋文, 感情, 南宋, 士大夫文化 キーワード (En): 作成者: 市來, 津由彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000261

朱熹の跋文における「感情」の表象

市 來 津 由 彦

本稿は、二〇一八年六月に開催された、國學院大學中國學會第六十一回大会の公開講演において、本稿の題目で話した内容を加筆補訂したものである。なお、「『感情』の表象」の「表象」とは、ここでは、「読者に読まれるものとして文字化され流通するようになっていく表現」といった意味である。

標記の題目の由来についてはじめに若干述べたい。ここで素材とするのは、朱熹『朱文公文集』巻八一〜八四の「跋」文である。精読すると多面的相貌をみせるこの跋文に、筆者はかねてより感じ入っていた。前任校広島大学においてはこれを大学院演習の素材とし、同時に、その解説を筆者なりに深化させた訳注稿を研究会誌『東洋古典学研究』に寄稿し、そのうちの巻八一の訳注が同大学定年時に完了した^{〔1〕}。朱熹跋文を読む面白さを中国学に関心ある諸賢に共有

していただけたらと内々思念していたが、そのおりしも今回の講演のお話をいただいた。力不足ながら、その面白さの一端を紹介すべく、これに応じることとした。しかし、講演というと、通常の朱子学の「思想」研究に対し何か興味深い事柄や視点を提起することが求められる。こう思案したときに、各跋文に見える「感情」に照明をあてると跋文表現の特色が示せるのではと思ひ至り、かかる題目としたわけである。

一般的に言えば、「思想」的主張は、その主張内容を「説明する」ことが必要であり、「説明」ということにおいては説明主体は説明対象と距離を置くことが要請される。これに対し、「感情」は身に貼りついているものなので、距離を置くことになじまない。思想の「内容」と「感情」とは同じ土俵では扱にくい。ために「思想」研究にとって「感

「情」は後景化される傾向にある。とはいえ、「思想家」といわれる人であつた人であれ、生活は基本的には感情、情緒とともにいつもある。思想の言葉も、その実、多くは感情とともにある。一体的にあるであろうその感情にふれられれば、思想の言葉の「主張」の重さ、事情の内実などもみえるのではないか。しかし、生まの感情、情緒は古典文という場にはのぼりにくく、感情と主張との関係のありようはみえにくい。ところがこれに対し、表現様式として「感情」が確かに内包化されている文章の一つとして「跋文」というものがある。朱熹に限定されるのだが、本稿ではこの文章様式の場において文字化された「感情」に関わる表現を熟観してみる。すると、思想的主張との関係で「感情」というものの扱いを朱熹がどう処理しているかがみえるのではないか、と思うのである。

ただし本稿執筆時点では、朱熹跋文の巻八二以下の訳注は右記のように未完である。資料解説が未了では論旨と別方向の内容が中心資料から出現した場合、論旨不明になりかねない。また、関連する先行見解の理解に及ぶことができていない。その意味では、「論文」ということを固く考えた場合、本稿は未完成の論考にとどまる。このことをはじめにお断りしておきたい。

「以下、節ごとに内容の増減があるが、講演の展開に沿つて論述する。ただし講演では感情表現の背景と意図の読み解きが中心であつたが、本講では跋文のつくり、朱熹の想定読者への効果などについても、一部踏み込んで述べたい。」

一 「感情」と「跋」文

本稿は、中国近世士大夫思想の定礎者とされる朱熹（一一三〇～一二〇〇）の跋文における「感情」の表しというものについて読み解くものである。その内容に入るにあたり、中国士大夫文化における古典文文章の各様式の中で、「跋」文という形式の表現の特質と、そこに表現される「感情」の位置について、まずふれたい。

「跋」文とは、一般論としていえば、詩文や書・画等の作品を鑑賞したときに湧き起こつた感想、評価、意見等を、その作品の後ろにつなげ保存した文章である。そこには評価の何らかの表明が入り、多くの場合、その評価には感動、感慨、つまり「感情」が伴う。そしてその跋文は、鑑賞・評価対象となつた具体的物体、モノとしての作品や書物に付加され、所蔵者の手元に置かれて通行、流通し、跋を求

めてきたり機会を作ったりした相手のみならず、もとの作品等とともに不特定多数の人の目に、同時代のみならず時を越えてふれる可能性がある。このことからして、跋文の書き手は、作品を見せてくれた人や所蔵者を原則として悪くは言わないし、後世から見られることを意識して表現に工夫をこらす必要がある。本稿で取りあげる朱熹の跋文は、多くの場合、書く機縁等の情報がたくさん書き込まれ、右の配慮をもって作り込まれており、どちらかといふとかなり饒舌である。

この跋文を取りあげるにあたり、朱熹の『文集』を念頭に置きつつ、「感情」との親和性を意識しながら、跋文の表現を他の文章様式と少しく比較してみよう。近世士大夫文化における詩文には多様な文章様式がある。それらの中で、韻文（詩・賦）や葬祭の哀悼文などの様式は、「感情」と親和的である。ただし後者は定型的な方向性があり、前者も生まの感情が吐露されているわけではなく、「詩」として読者と時を越えて共有できるかたちに昇華され詩語化された表現をとる。一方、朱熹の「思想」における「感情」の問題として、「四端・七情」などの「感情」が思想言説の中の説明対象として語られることもある。しかしそれらは論説の言葉ともいふべきものであり、感情そのものでは

ない。⁽²⁾

そうした中で、この「跋」文という文章様式は、右に述べたように、評価に関わる制御された言葉としての「感動・感慨」という範囲でながら、多様な方向で「感情」が語られる。そこでは身に貼りついているという「感情」の特質が、評価の主張の方向性を強調する意図をもって巧みに使われる。評価の主張の中に「思想」的なものが込められるときには、「思想」との親和性が立ち現れる。生活の生まの感情は身に貼りついているために客観化されにくいのだが、この跋文の中では、身に貼りついているという「感情」の特質が、文字化され一定の制御を受けつつ、文章の中で生かされるのである。

跋文内容の興味深さとともに、感情の論として本稿で示したいことは、端的にはこのようにことに尽きるが、以下、その具体相を、朱熹跋文の中に見ていくこととしたい。

二 朱熹跋文の世界

『晦庵先生朱文公文集』（以下、『朱集』と略記）正集百卷の中で跋文は、卷八一〜八四に収載されている。個別の跋文の読み込みに入る前に、本節では、文集におけるこの

朱熹跋文の外形の概要と跋文の読み方の基本、及び本稿で取り上げる巻八一を見ていく視点について述べる。

さて、各跋文の末尾にはおおむね日付があり、その日付の順序によっておよそは並べられている。題目や、おおむね記されている日付からうかがえる概要は左記の通りである。なお、文集の編集にあたり、すべての跋文が拾われているわけではないであろうこと、配列と題目は文集の編者の手によることには注意しておく必要がある。巻八一～八四の各巻ごと、朱熹の所在と社会活動の中心点や力点が動く。跋文の図と地ということを想定した場合に、地の背景となる問題群を想定する必要がある。これを表の「所

巻	条数	時期	年齢	「所在」、社会的活動
81	61	隆興元年正月 （1163）	30・40代	「崇安」思想彷徨、「定論」↓48歳四書集注へ 家族・親族／閩北人網／50歳「南康軍」知事
82	77	淳熙8年11月 （1181）	50代	広域講学・地域講学 ／「武夷精舍」講学 ／「武夷精舍」講学
83	67	紹熙2年10月 （1191）	60代	「漳州」知事／「建陽」／「漳州」知事／侍講／「建陽」
84	75	慶元2年7月 （1196） 〔6年3月死去〕		「建陽」／党禁

在」、「社会的活動」欄に簡略に書き込んだ。

この跋文を読み解く場合、跋文著者の感想、評価、意見等を著者の主観に即して理解することが基本目標となる。だが、それには然るべき手順と考える必要がある。³⁾すなわち、右に述べた跋文というものの作成と流通のあり方からして、跋文の中に書き込まれている跋文作成の過程や機縁、すなわち鑑賞作品の作者もしくは所蔵者と跋文著者との関係、その関係が生じる経緯や、跋文著者が現に目の前で見ている作品のモノとしての姿、等々を推測、把握し、著者が跋文をいま書こうとする「場」を想定することが、よりよき理解につながる。跋文の著者の感想、意見は、一般論ではなく、跋文というもののある方からして、著者におけるモノと機縁との交錯というその時々々の現場から出てくるものである。現場のリァリティぬきに十全な理解はない。分解していえば、

- i、機縁 跋文のすそ野にある跋文作成過程に関わる事実関係の把握、
- ii、表象 跋文著者にとつての鑑賞の「場」に仮にわが身をおきつつ、跋文著者がその所与の場の中で感想や評価、あるいは自身の個性をどう表現していくかの理解、

との二段階に仮に分離し、結果としての後者の立場と時点に定位しつつ、両者を架橋していく作業が必要となるということがある。

このことは、跋文が異なる両面の資料的特質を持つことを物語る。iの側面は事実関係とも言える面であるが、ここに即して言えば、跋文は、著者をもつ人脈、人間関係、著者の人生史の事実関係を示す資料となり、またiiの側面は著者の表象とも言える面であるが、この面に即して言えば、著者の思想、思考法、美意識などの解析の資料となる。ただし、この両面は別々のものではなく、もと跋文作成の「場」から両者一体のものとして出てきていることは忘れてはならない。

以上は跋文読解技法のいわば一般論だが、この朱熹跋文は、いわゆる「朱子学」研究という視点から、右のiiから彼の思想内容を語るものが抽出され、理気心性論といった哲学や思想的側面を解析する中で、補助的、場合によっては主要直接資料として使われてきた。あるいは逆に右のiに注目し、ある時点で誰と交渉を持ったかといった、朱熹の思想形成史、人生史の事実関係を確定する資料として使用されてきた。ただし自戒も込めてであるが、i、iiがセツトで形成されているという跋文の元々のあり方に沿って言

うならば、その時々の研究上の必要性から情報を適宜選択するという利用は、跋文形成の現場に即した本文それ自体の十全な理解に至らなくなる可能性があるという問題を孕む。跋文それ自体の理解としては、個々の跋文ごとに、iによってiiが表象され、またiiの基礎にiがあるという両面の関係の中でその内容を検討することが求められる。そして、そうした読解により、iiに沿っては、いわゆる「朱子学」理気心性論に限られない、南宋士大夫としての朱熹の日常生活における文化意識、美意識等といった、士大夫間で共有される精神生活の水準や質の検討が前面に浮かびあがり、理気心性論の哲学等に関わることも、その一部として位置づける方向が出てくる。iに沿っては、「朱熹の思想」研究に限定された士大夫間交流ということではなく、南宋代の士大夫交流ルールという文化意識が前面に浮かびあがり、朱熹の「思想」もその一角として位置づけられることになる。跋文資料が持つ特質に沿うことにより、「朱熹思想研究」を南宋士大夫文化世界のものとして広い視野から捉えることが可能となっていく。そこからは、逆説的なことになるが、後に朱熹の学説、言説が士大夫思想文化世界の、功罪を含んで主流となっていく理由の、よりすそ野からの解明をはかることができるのではないか。本稿は、

このことの試みの一端でもある。

朱熹の跋文をそれ自体として読解するときには、以上に留意することが求められる。

以下、このうちの巻八一における「感情」の表象についてみていく。ただしその「感情」の扱いであるが、各跋文にはそれぞれ個別に異なる多様な感情が込められている。「感情」と漫然と言つても、話がとりとめもなくなる。そこで、個別であるとともに共通している側面を見いだせないかと考え、本稿では、「感情が強く揺り動かされた」ということを端的直接的に表明するものとして「嘆・歎」や「嘆息」「太息」、またこれに類縁するいくつかの表現に注目し、限定的にとりあげることとしたい。心を揺るがせられたその理由を、跋文とそれが書かれた背景の中に追跡し、これらの語の語りとその表現の意図をみていき、「思想」家朱熹が南宋の「士大夫文化」世界を生きたがたをうかがいたい。

また、巻八一所収の跋文は、主として、朱熹三十代から四十歳のいわゆる「定論」の思考法確立に至る思想彷徨、それが四十八歳に『四書章句集注』にひとまず結実し、その後、五十歳春から満二年、江南東路南康軍に知事として

赴任した時期のものである。その跋文を読む際の整理の視点として、跋文の底流に流れる諸問題の領域を、朱熹個人の身辺から士大夫文化世界総体へと広がるものとして設定し、仮に、(1)親族への思い、(2)朱熹が育った福建北部の人網への思い、(3)南康軍での知事としての活動での思い、(4)南宋に生きる士人としての士大夫文化世界に対する思い、にひとまず分けてみていく。なお、宋金戦争の影響、道学意識、北宋道学に関わる先人評価などが、朱熹に親近な人々の生活意識において通底する問題として流れていることが各跋文の中にみられることも付言しておきたい。

三 跋文（巻八一）にみえる朱熹の感慨

三一 家族・親族人網の中で

朱熹は少年から青年に達するまで福建北部の建州（のち建寧府）州域で育ち、またその死までこの地域に住んだ。生活上の人と人との関係の基本はこの地域にあり、地縁・血縁・学縁が複雑に絡まり合う。しかし朱熹がこの建州の人となる前に、彼のルートとしての父方の親族は、父朱松の出身地の徽州婺源県にいた。ここの人々との関係に関

わって感情を吐露している場面の跋文をまずうかがおう。

朱熹は、この徽州婺源に二十歳のときに進士合格の報告で墓参に行き、このときに親族の多くと初めて会う。そして四十七歳のときに二回目の墓参に向かう。それまでの二十年間に、程洵（朱熹の内従弟で祖母程氏の一族。一一三五〜九六）などこの郷里の親族とも連絡があり、道学系儒学思想の新たなリーダーの一人として注目されはじめていた。

ここでとりあげる巻八一第15条跋文（以下、「巻」は省略）は、その旧郷里の親族・地域社会の人網を確認するよろこびともいう場面の跋文である。以下、各跋文は本稿では日本語現代語訳文で示し、原文を後に附す。解説は一々は注記しないが、既発表訳注稿の注と補説を簡略化して用いる。詳細については元の訳注稿を確認していただく所幸である。

○第15条 張公予(珪)の竹溪詩に跋す（跋張公予竹溪詩）

さて、その婺源で朱熹は、朱氏一族の一人に深く関わった張珪かという人の詩集をその息子にみせられ、跋文を求められた。この張珪には物語があり、その息子が朱熹に詩集みせた理由もその物語の中にあると思われるので、張珪に

ついてまず紹介する。

すなわち、張珪、字は公予は、罪を犯した弟の身代わりとなつたが恩赦で死は免れ、宋金戦争時の宋の軍閥の指導者の一人、韓世忠にめぐり遇つて評価され、韓の下で軍功をあげた。その後、建炎三年（一一二九）に、朱弁（一一四七。朱熹の父の朱松と三従兄弟。著に『曲洧旧聞』が残る）が金に副使として赴くのに随行、朱弁がそのまま抑留されるのと共に抑留され、十七年立つて朱弁とともに帰還した。南宋の高宗は張を登用しようとしたが、張が退役を強く願つたので許した。郷里の自宅に竹が多かつたのに因んで「竹溪逸士」の号を自筆で与え、また、正使、副使でもないゆえ自由にもできたのに宋と朱弁を裏切らなかつたのを称え、その街路に「昭義」の名も与えて手厚くねぎらつた。このような物語である（『弘治徽州府志』（天一閣蔵）巻九、人物三「孝友」及び『新安文獻志』の張珪に関する記述による。朱弁については、『朱集』巻九八「奉使直秘閣朱公行状」参照）。

朱弁ゆかりのこの張珪の詩集を見せられて、朱熹は次のような跋文を書いて与えた。なお、訳文はほぼ直訳のややくどい文。ゴシック体は「嘆・歎」「嘆息」「太息」等に關わる箇所、「（ ）」は補足的な説明、「〔 〕」は文脈を明確

にするための補いである。訳文の後ろに「」で原文を掲げる。その中の「」は訳文で段落にした箇所である。

婺源は山に囲まれた郷ではあるが、古くから文人の士人が多い。竹溪丈人張公予（珏）どのは、そのお一人である。歌や詩を作るのが好きであり、「作品は」精妙秀麗で、広々大きく、自身で満足したてきものは、「他と同じく」つねづね静か穏やかな境地に行きついている。その長大あるいは短い賦詩も、またすべてそれぞれそのすがたを具える。晩年には山間の畑地、竹林の中に隠棲し、もっぱら詩と酒によってひとり娛しんで、自身の老いを彼方に置いた。交際する人は多く当時の人望ある方々で、みな自らへりくだり人を推し進める人で、この人を褒め称えることを楽しんでた。呂侍郎（広問。北宋の著名名族、呂氏の一員。一一〇三〜七五。宋金戦争の混乱時に婺源県主簿としてこの赴任地に避難していた）らの諸氏が題跋した文編をじっくりみると、理解できる。

淳熙丙申（一一七六）、わたしは建安からこの故郷婺源に帰省した。公予どの子息の珍卿どのが、「この詩集を」持参して示された。そこで何回も吟じて感

嘆し「三反咏嘆」、詩をお作りになった趣意を充分に究めみる事ができた。諸氏が称えたその言葉がいつわりでないのは、まことのことなのだ。

しかしながらわたしはこう聞いている。公予どのは生まれながらの資質として孝行と友情厚いこと人なみはずれ優れ、兄弟への慈しみに篤いこと、酷い目に陥ることをも顧みず「弟の身代わりに」災難と辱めを自身で選び取って悔まなかつたほどのことについては、古の誠実な行いある君子もなかなかできないものがある。諸氏は彼の詩をひたすら盛んに称えるのではあるが、しかしこのことには全然言及されないで、「朱弁の朱氏の族員なのに」わたしはこの話を認識できていなかった。そこでひそかに詩編の後に記して故郷の人に示し、公予どのが世の中に見出されのは、ただ彼の詩「によるの」だけではないことをわかっていただくようにしたい。「これがわかれば」おもうに名教において補うことが深くあろう。

五月既望（新暦一一七六年六月二四日）、本邑の子の朱熹が書きつける。

「婺源雖巖邑而故多文士。竹溪丈人張公予、其一也。好為歌詩、精麗宏偉、至其得意、往往亦造於閑澹。其

大篇短韻、又皆各得其体。晚歲屏居山田水竹之間、專用詩酒自娛、以忘其老。所与游多一時名勝、類皆退讓推伏、衆称道之。觀呂侍郎諸公所題文編、可見矣。／淳熙丙申、予自建安歸故里、公子之子珍卿、持以見示。因得三反咏嘆、究觀製作之意。信乎其如諸公所称不誣也。／然予聞公子天資孝友絕人、其篤於兄弟之愛、至犯患難取禍辱而不悔、有古篤行君子所難能者。諸公乃徒盛称其詩、而曾不及此、予不能識其說也。因竊記編之後以示鄉人、使知公子之所以自見於世者、不但其詩而已。蓋於名教庶亦深有補云。／五月既望、邑子朱熹書。」

「三反咏嘆」は詩のできばえを称えるだけのようにみえるが、跋文の全体的意図はそこに終わらない。おそらくはということであるが、張珏の息子としては、詩集の顕彰ということを超えてこの父を顕彰したい。そこに士大夫思想学术界で力をつけてきている当地出身で当地に足場がある朱熹が来た。朱弁の親族であるこの朱熹こそが父の顕彰にふさわしいと踏んで、彼は父の詩集を提示する。単に二人が会うという以上の、親族および地縁の人網と宋金戦争から出た物語とが前提としてあるということが、この提示に

は見て取れる。張の息子による右の物語を踏まえたこの人網関係の召喚と、それに応じて、この地に朱弁の朱氏一族が根をはっていることを確認すること、その確認の係を「本邑の息子」としてわたくし朱熹がおこなうことを地縁、血縁に表明することが、この跋文の意図である。

頼まれた朱熹からすれば、見せられたのは詩集なので、詩の表彰という枠の中で称えることが求められる。しかし張珏は朱氏一族の功労者朱弁にも関わる人であり、それに関わる面での張珏の生涯全体も称えたい。そのことにより朱の親族および地縁の人網との今の連携も表現できる。そこで朱熹は、呂広問らによる詩の顕彰を生かしつつ、「三反咏嘆」したと詩への感嘆を前半で記述する。しかしそれは、詩への感嘆を表明することで見えにくくなる、金からの帰還物語という結果を生んだその根源としての張珏の心のありようを跋文の贅辞に組み込む伏線の措辞であった。張の心のありようを表に出すところに、本跋文の思想的主張がある。前段階的に「咏嘆」を言うことによって、その主張を浮かび上がらせる。そのことで、詩のできばえという枠で評価していた先行の跋を生かしながら、朱熹は自身の思想的主張からの評価枠を設定するのである。そうした文脈づくりの中で、本来、身に貼りついた感嘆の心が、制

御され表現される。かくて、本跋文は、旧郷里の親族と地域社会の人網を朱熹が確認するよろこびを表明する表現のものになったのである。

三二 閩北の地縁・血縁・学縁の人網の中で

次のコーナーは、先に述べた福建北部の地縁・血縁・学縁の人網の中での人網の人々への思いである。父朱松がその死にあたり、十四歳の朱熹をはじめその家族を託し、これを受け入れてくれた胡憲（一〇八六～一二六一。号籍溪。胡氏湖南学の胡安国は同族、もと同郷）、劉勉之（一〇九一～一一四九。号白水。姉妹のいづれかが胡憲の妻。娘が朱熹と婚姻）、劉子翬（一一〇一～一四七。号屏山。孫が朱熹の娘の一人と婚姻）の三先生、劉子翬の兄の劉子羽（一〇九七～一一四六。劉氏は崇寧五夫里の有力一族。朱熹母子に住宅を提供。白水は五夫の北、籍溪は南の村）、その息子の劉珙（一一二二～一一七八。官は參知政事（副宰相）に至る。朱熹より八歳年上）、劉珣（一一三八～一一八五。朱熹より八歳年下）ら、が特に大切な人である。朱熹はこれらの人々と姻戚関係を結び、血縁、地縁として土着化していく。これらの人々に関わる感慨の事例を

一例だけとりあげる。⁽⁵⁾

○第51条 陳簡齋（与義）の帖に跋す（跋陳簡齋帖）

本条は、朱熹五十二歳の春、二年にわたり知事をしていた南康軍より崇安の自宅に帰着してほっとした気持で、亡くなった劉子羽、劉珙父子ら大切な人々を懐古するものである。

陳簡齋は、陳与義（一〇九〇～一一三八）、政和三年（一一二三）上舍及第の人。はじめ墨梅詩によって徽宗に知られ、靖康の変の時は湖南に難を避け悲憤慷慨の詩を作り、紹興元年（一一三一）に中書舎人、七年に參知政事。羅大経『鶴林玉露』は、蘇軾の後の北宋末、陳師道、黄庭堅のあと南宋初に出た詩人の中で、その詩風と忠節をきわめて高く評価する（卷一六）。帖を贈られた劉子羽は、父劉幹の蔭で官に就き、建炎と紹興年間前半は、宰相張浚の幕僚として、寄せてくる金に対し今の四川地域を保全するのに貢献し、その他、宋金戦争で宋の文官指揮官として盛んに活動し、講和後は退隠した。その神道碑を朱熹が書き、墓誌銘を張栻が書く。張栻は張浚の息子で、朱熹の儒学思想上の親友である。

簡齋陳公（与義）は、前に作成した詩作品一卷を（自身で書き写して、宝文閣劉公（子羽）どのに贈った。劉公の跡継ぎである觀文殿學士劉公（珙）どのはこの書を大切に、広漢の張敬夫（栻）どのに依頼してこの書物に標題を書いてもらった。わたしは前にこの詩巻をお借りし、「南康軍の庁舎の一つ」江東道院に模刻しようとしたが、上手な技術者をとうとう見つけれなかったために断念した。

その頃一人で読み返しては楽しみ、手からはなすことができなくなつた。その詩と文字の並外れた素晴らしさに感嘆し、加えて劉公父子と張敬夫のものにもはやお会いできないことを慨嘆した「嘆其詞翰之絶倫、又嘆劉公父子与敬夫之不可復見」ためである。俯いては地を、仰いで天を見て大きくため息をつき「俯仰太息」、そこで詩巻の末尾に「この文を」書きつけて、「所藏者」劉氏（珙）に返却するのである。

「簡齋陳公手写所為詩一卷、以遺宝文劉公。劉公嗣子觀文公愛之、属広漢張敬夫為題其籤。予嘗借得之、欲摹而刻之江東道院、竟以不能得善工而罷。／＼間独展玩、不得去手。蓋嘆其詞翰之絶倫、又嘆劉公父子与敬夫之不可復見也。俯仰太息、因書其末、以帰之劉氏云。」

朱熹は劉珙の弟の劉玘から詩巻を長期間借りており、崇安帰着とともに返却しようとしたと思われる。張栻も文字に堪能と朱熹は認識していた。第4条「張敬夫（栻）の書する所の城南書院の詩に跋す」にそのことがうかがえる。朱熹にとつての兄貴分の劉珙との書文字訓練の思い出が朱熹にはあり、本跋文卷八二の第17条「曹操の帖に題す」において、若い頃、劉珙は顔真卿を練習、朱熹は曹操を練習し、劉玘に、「おれが学んでいるのは唐の忠臣、お前は漢の篡賊だ」とからかわれたことを述べている。その劉珙について、本卷八一第50条「張巨山（嶠）の帖に跋す」は、宋金戦争時に劉子羽（上司）の部下だった張嶠（字は巨山。陳与義の一世代下の親族で、陳与義にも学び詩文にすぐれる）と交流があり、八歳の劉玘が張嶠から手取り足取り書を教えられたことを述べる。

地縁・血縁・学縁の重なりという視点で見れば、本条跋文は、三人を単に思い出話として心に思い浮べたので「太息」したということではない。三者に「もうお会いできない」という心情は、その前の「嘆」で表明されている。その情に加え、モノとしての詩巻に書かれた陳与義および張栻の文字を前にし、書文字という士大夫文化修得の訓練を身体的感覚で回顧し、⁶⁾「つい三年前に亡くなった劉珙、一

年前に亡くなった張栻に対し身体の奥底から感情がわきあがります」ということを、朱熹を育ててくれた劉氏の、過去に共に学び生活の中で共感感情を持つ現在の劉氏の当主である劉珣に対し重ねて言いたいために、敢えてくどい言方で「太息」と書いたとみられる。

三—三 南康軍知事としての職務のあいまい

次のコーナーに入る。時はやや遡るが、先に述べたように朱熹の五十歳の四月に、彼は南康軍の知事として軍治が置かれている星子県（鄱陽湖の西岸、廬山の東南麓）に赴任した。そこでさまざまな出会いのうちに書いた跋文のうち二点をみる。

○第31条 蘇文定（轍）公の「直節堂記」に跋す（跋蘇文定公直節堂記）

北宋末以来の南康軍の状況、それに立ち向かう士大夫の生きざまに感慨を覚え、知事としてのみずからの立場について朱熹自身が確認するともいふべき内容のものである。本跋文でのモノにあたるのは、蘇轍の「直節堂記」という文章というよりは、軍庁舎の一隅の庭裏に残る焼けただけ

たヒノキ系常緑樹の太木一本である。

北宋の蘇軾の弟蘇轍（一〇三九—一一二二）は、新法党、旧法党の政治方針争いの中で浮沈した旧法党系の高官（門下侍郎（副宰相）に至る）、文人。神宗が亡くなり兄蘇軾に対する配流措置がゆるめられ、蘇轍も復活することとなり、江西筠州からの北途、南康軍を通過した。その際に時の知事に求められて書いた文章が「南康直節堂記」である（『欒城集』巻二四）。軍庁舎の建物の東にある堂の庭に八本の立派な杉の太木があり、その木陰の堂はもと軍役所の吏の詰所で人知れず役立っていたが、これを建て替え、杉木の立派さと堂が人知れず役立っていたことを称えて「直節」堂と名づけた、との内容である。

右、南康軍の庁舎の「直節堂記」は、欒城の蘇文定公（蘇轍）が郡の太守の徐師回（字は望聖）のために作り、さらに自らの手で書いて石に刻んだものである。

元豊乙丑（八年。一〇八五年）から本年 淳熙己亥（六年）までの隔たりは、九十五年にもなり、新安出身のわたくし朱熹が「今年」この郡に赴任して政務をおさめることとなった。「着任して」堂のありかを尋ねたが、

もはやなくなっており、「堂記」に言う「杉も残っていない。蘇氏〔自書〕の「堂記」文〔を刻んだ石〕を求めたが、もはやもとの刻石ではない上に、別の場所に移してしまったとのことである。そこで地域の長老を訪ね歩いたが、刻石の場所を言える者はとうとういかなかった。おもうに元豊から今まで、その（九十五年の）間に世の諸事も変化つづきであった。しかしながら建炎年間の群盗のこと（金軍の南下）は今年でやつと五十年であり、古い遺跡が荒れて滅びることこれほどになるはずはない。考えるにこの堂が壊されたのは、あるいは紹聖の党論の時であろうか。諸事に心を馳せ懐いを興し、感慨深くずっと嘆じたのである〔撫事興懐、慨然永嘆〕。

ふり返るに〔建炎の当時〕この郡地域は貧しくて民は疲弊しつづけ、たとい堂もとの土台が残ったとしても、堂もとの姿を復活させることは趨勢としてやはりできなかつたろう。ただ一箇所、「軍庁舎の」建物の（「堂記」がいう「東」ではなく）西に扁額がない建物があり、その庭に老木の柏（ヒノキ系の常緑樹）がある。焼き切られた跡があり、生気がほとんど尽きているが、そびえ立って倒れないその姿は、尋

常でないことをあれこれ体験しても、剛毅に自立し続けて、威厳あつて衰えない志士・仁人のようである。そこで〔「堂記」の〕「直節」の号を取つてこの建物に配して、「記」を刻した石を運び壁にはめ込んだ。さらに庭の雑木をすべて切り去り、杉や柏を雑え植えて、昔の賢人が遺した願いを目のあたりにさせようとしたが、もはや〔木を植えかえる〕時節ではなく、わたくし熹も病気のため帰郷することを告げた（ただしこれは認められず、任は翌々年春まで続いた。―市來）。ああ、のちの君子よ、あるいはわたしの志を成就してくれることがあるであろうよ。

この歳の八月丁亥（新暦一一七九年九月四日）に識す。

〔右、南康軍治直節堂記、欒城蘇文定公為郡守徐君師回望聖作、又手書而刻石焉。／自元豊乙丑距今淳熙己亥、凡九十有五年、而新安朱熹來領郡事。問堂所在、則既無有、而杉亦不存。求其記文、則又非復故刻而委之他所矣。於是歷訪郡之老人、竟無有能言其処者。蓋自元豊以至今、其間世故亦多變矣。然建炎群盜於今纔五十年、旧迹蕪滅、未忘至此。意者斯堂之毀、其在紹聖党論之時乎。撫事興懐、慨然永嘆。／顧郡方貧而民

已病、正使堂之故基尚在、勢亦不能有以復於其旧。独
 聽事之西有堂無額、而庭中有老栢焉、焚斷之余、生意
 殆尽、而屹立不僵、如志士仁人、更歷變故、而剛毅独
 立、凜然不衰者。因取直節之号、寓之此堂、而鞏記石
 陷壁間。且欲尽去庭之凡木、而雜植杉栢、以彷彿前賢
 之遺意、則既非時、而熹亦以病告帰矣。嗚呼、後之君
 子、其尚有以成予之志也夫。／是歲八月丁亥識。」

靖康の変以来の第一次宋金戦争において、金軍は一時、
 長江を渡河し、金軍に協力した河北の漢人勢力とともに
 (現)福建、湖南、江西にまで入った。その一こまとして、
 建炎四年一〇月、金に協力する李成麾下の馬進の軍が江州
 に進み、一二月に南康軍で大きな戦いがおこなわれた(『建
 炎以来繫年要録』卷三九、建炎四年十一月癸卯条、『宋史』
 卷二六、高宗紀、建炎四年等、参照)。しかし堂と碑石は
 このときに失われたのではないと朱熹はみる。旧法党の元
 祐年間に高官として活動した人が、次の新法党時代に一転
 して左遷させられ、熙寧・元豊の新法党官僚を元祐年間に
 左遷させる詔勅を多く書いて昇進したのが蘇轍であり、そ
 のため新法党人士の攻撃を受けて南方僻地の雷州に流され
 た。蘇轍の字を刻んだ石がないのは、宋金戦争の偶発的な

被害によるのではなく、この蘇轍排斥に伴う意図的なこと
 かと推測する。そして、焼けただれた栢(このてかしわ)の太木の前にた
 たずみ、南康軍を舞台とした北宋の政治党争と宋金戦争の
 災禍を回顧し、諸事多端であっても、担当地域社会の安寧
 を企図する、「志士・仁人」であるべき知事という立場の
 役目に思いを馳せ、軍の官・吏にその思いを共有してもら
 いたいと、今の知事として朱熹は考える。

この共有の願いを強調するために、身に貼りついた情緒
 にわたる「慨然永嘆」ということを言ったとみられる。

蘇轍の文とこの跋文を右に刻み庁舎の建物にはめ込むと
 いうのは、作品の所蔵者向けに書くとかのふつうの跋文に
 比べ、公共向けに評価や感情を表明することになる。情緒
 に関わる言葉がそこに入るの是一見そぐわないが、言う者
 の立場と位置づけけしだいでは主張に効果を持たせられるこ
 ともある。ここもそうしたねらいがあったと思われる。

○第36条 王(庶)枢密(祔居之(寛))に贈るの詩に跋す(跋
 王枢密贈祔居之詩)

次に、南康軍における朱熹の思想活動に関係するものに
 ふれる。すなわち、周惇頤と二程の關係の伝承に関わる祁
 寛という人に対し、南宋初に講和政策を進めた秦檜に失脚

させられた主戦派の王庶が贈った詩というものを、朱熹は祁寛の息子に南康軍で見せられた。その詩の感想を述べた跋文である。

王庶（一〇四二）は、崇寧五年（一一〇六）の進士。宋金戦争の初期、陝西方面の指揮を採って軍功をあげ、紹興八年（一一三八）三月、枢密副使（軍事副大臣）。ところがその二日後に秦檜が尚書右僕射（筆頭宰相）に二度目の上って和議をはかり、王庶はこれに反対し、「凡そ七たび疏して官を免ぜられんことを乞ふ。」という事態となり、知潭州となって退き、その後、道州（湖南）に流され死去した。

祁寛（生没年不詳）・字居之は、程頤晩年の高弟として名高い尹焞の門人。『和靖集』卷三「題論語解序」によると、尹焞『論語解』の完成に与る。乾道初年前後まで存命。周惇頤「太極図」が二程を経るといふ伝承がこの祁寛から出ており、朱熹は南康軍知事となる十年ほど前にその話を自身の研究に取り込んでいた。

王公（庶）は資質が剛毅であり、大いなる節義がある。朝廷で和議を論争した時には、秦檜を視ることまるで眼中にないかのようであった。しかし一方、腰を

低くし賢人にへりくだり、誠意をこのようにあらわすこと、この詩のようであり、これはまさしく尊敬すべきことである。

〔詩を贈られた〕祁公（寛）は身分を持たない学生（上舎にいたか？）の身で強い権力を持つ大臣に対抗し、乱暴な下役を非難し、困窮なときの交わりを最後まで遂げた。その心を養うこと手厚く、節義を守ること堅いのでなかつたならば、ここにまでどうして及ぼうか。この巻子を何度も繰り返し読み、このことのために大きくため息をつき「三復此巻、為之太息」、詩の後ろに書きつける。

淳熙己亥臘月壬辰（新曆一一八〇年一月七日）、新安の朱熹が謹んで書きつける。

〔王公素剛毅、有大節。方廷争和議時、視秦檜無如也。而能屈体下賢、出於誠意如此。是可尚已。〕／祁公以布衣諸生抗彊相、折悍吏、卒全窮交。非其所養之厚、所守之堅、何以及此。三復此卷、為之太息、而書其後云。／淳熙己亥、臘月壬辰、新安朱熹謹書。〕

朱熹はこの南康軍知事期に、祁寛の息子の祁真卿、字師忠に会っている。そのおそらく初回のときに、この詩巻（表

装されている詩)を見せられた。祁真卿の思惑は、先にみた張珏の息子と同じく、父の顕彰にある。朱熹が招いたか祁真卿が自分からやってきたかはわからない。一方、朱熹は、学説の根幹に関わる「太極図・図説」に関連して、周惇頤ゆかりのここ南康軍で周子顯彰事業を行いたい。その祁寛は、右のように周惇頤「太極図」が二程を経るといふ朱熹の道統説を構成する要素の情報の出所として朱熹にとつて大切な人物である。その彼が政治的にも「正しい」人物であることが、朱熹には必要だった。そのことをこの詩巻によつてはつきり確認できた。王庶が祁寛に贈つた詩を称えることは、そうした意味を持つ。祁寛が「心を養ふこと手厚く、節義を守ること堅い」人だったとまず言葉で説明し、次いで朱熹の身に貼りついた情緒のところからその見立てをかさねて強調、確認するために、「太息した」と書いて祁真卿に感謝を表明するとともに、後世に向けて彼が「正しい」人だったことを主張したとみられる。また、読みようでは、ほっとした気持もうかがえる。本跋文では、「太息」が率直、効果的に語られ、また思想の問題とも自然につながる表現となっている。

三一四 士大夫文化を生きる

最後のコーナーに入る。跋文において朱熹は、その時々現在の感慨だけではなく、時代を越えた射程を持つ感慨を述べてもいる。その場合、対象作品の所蔵者や直接の関係者ばかりではなく、想定される跋文の読み手は、王朝統治体制が続く中で未来においてこの統治に関与する士大夫全般へと広がっていく。未来の士大夫を相手に、朱熹自身の「(あるべき)現在」を主張するような内容のことを特に表明したいときに、身に貼りついたものとしての情緒、感情にあたることを書き込んで強調する。

○第14条 和静先生(尹焞^{いんたふ})の遺墨の後に書す(「書和平先生遺墨後」)

本条は、朱熹四十七歳のときに、程頤晩年の高弟である尹焞の文字(拓本)を見て、尹焞の学びの姿勢に触発されて感慨を述べたものである。

尹焞(一〇七一〜一一四二。号和靖)は、程頤に元祐年間以後に密着して師事した程頤晩年の高弟。程頤に『易』を特に授けられる。また程頤の敬説を充実させたと言われる。科挙は早くに断念した。南宋初の紹興五年(一一三五)に

天子講官となる。「遺墨」の内容にあたるものは、現存『和靖集』に残る（『和靖集』（四庫全書）巻四（『和靖尹先生文集』は巻五）「壁帖」、全五十四條）。張栻の跋文も附録されている。その内容は、例えば「壁帖」第一条は、周惇頤の現行『通書』「聖学」をそのまま書いた後、「惇謹しんで書す」と記していて、左記本条跋文に言うような、自戒の貼紙として用いた体裁を取るようである。

和静尹公（惇）先生の遺墨一卷は、すべて先生の晩年の書きつけであって、聖賢が開示された、気を治め心を養う（『荀子』修身篇）要点をご自身で書き、家の壁に貼り付けて、自らをいませしめたものであり、その家が整理し所蔵していた。このたび陽夏（開封）の趙侯（燁）が、印刷して臨川（江西）の役所の部屋に保存し、複製本をお寄せくださった。

わたくし熹がひそかに思うに、前代の賢人は修養を続けること怠るなく、死シテ後ニ已ム（死ぬまでやめない―『論語』泰伯篇）のだ。この尹先生の心が明るく輝いていること、なお見てとれるようであって、趙侯が模刻した根本の意図は、その文字の書き方のうまさをおくみ取り、好事家が相伝え鑑賞するのに提供する

ということではないのだ。うやうやしく読ませていただき篇を終えると、「遺墨の精神に」うつとりしてわれを忘れた「恍然自失」。そこでこの遺墨の後ろにあって記して、みずから告知しておくのである。

淳熙丙申（三年）三月丁巳（二日―新曆一七六年四月二二日）、新安の朱熹がつつしんで書きつける。「和静尹公先生遺墨一卷、皆先生晩歳片紙、手書聖賢所示治気養心之要、粘之屋壁、以自警戒者。其家緝而藏之。今陽夏趙侯刻眞臨川郡齋、摹本見寄。／熹竊惟念、前賢進修不倦、死而後已。其心炯炯、猶若可識、而趙侯所以摹刻之意、又非取其字画之工、以供好事者之伝玩而已。捧読終篇、恍然自失。因敢識其後、以自詔云。／淳熙丙申三月丁巳、新安朱熹敬書。」

拓本を作成して配布した趙燁（一一三八―一一八五）は、進士となつてはいるようだが合格年は不詳。本条跋文の淳熙三年の前年に朱熹、陸氏兄弟、呂祖謙が会合した有名な鷺湖の会が開かれ、趙燁はそのとき「臨川太守」すなわち知撫州として、近辺の劉清之らを引き連れて参加していた。本条で朱熹が問題としているのは、尹惇の文字の筆跡であり、先賢の文章を書き写して壁に貼るその行為である。

北宋の程頤、程頤は、朱熹自身の師承関係からたどると、朱熹—李侗—羅從彦—楊時—二程というように何代も遡ることになり、必ずしも近い存在ではない。しかし程頤晩年の高弟尹焞は、南宋に入り十五年も生きた。尹焞とその関係者から遡ると、さほど遠いとはみられなかったと思われる。尹焞の門人として、例えば王時敏という人がおり、現行の尹焞の文集に収録されている尹焞語録は、この王時敏の記録である。尹焞の教えを受けたこの王時敏に影響を受けて朱熹のもとに師事しに來た朱熹門人もおり、尹焞や王時敏を話題として朱熹はその門人と語ったり、また王時敏とも書簡を交わしたりしている。南宋半ばの朱熹らと程頤との距離を、この尹焞、王時敏を通じた師承関係によつてたどった場合、晩年の程頤に親しく接した尹焞が中に一代入るだけである。尹焞が語る程頤の思い、出を王時敏が聞き、その王時敏が語る尹焞の言葉朱熹門人となった者が朱熹に語る。そこには、程頤、尹焞との距離が遠いものではないと感じ取れる可能性があった。

模刻だが、南宋における道学顕彰運動にとつて比較的身近に感じられる、このような尹焞の文字の筆跡が、いま朱熹の眼前にある。その文字は単なる文章ではなく、自室の壁に貼り付けて教誡とする、まさに尹焞の「進修」の姿勢

を示すものとして存在し、それを朱熹はいま見ている。その文字を見ることにより、その文字を書いて眺めた尹焞が、今みている自身の視線にいたことを朱熹は感得する。右に例示した周惇頤『通書』「聖学」で言えば、尹焞がこの語を選んだ理由、周の意をわが心に載せて書き写しているときの周との対話の心理や、その周の言葉をわが部屋の壁に貼つて眺め反省する尹焞の気持等々に、想いを馳せる。そのことを通して尹焞がその文字を書き眺める心映えに一体化するゆえに、「わたし朱熹は」捧読して篇を終ふれば、恍然自失するるのである、と跋文は読める。

書き写した尹焞の筆跡、それを眺め読む行為というように、身体的振る舞いを通して朱熹は尹焞に重なり、尹焞は北宋の諸先生と重なり、そこに「伊川先生（程頤）」が時空を超えて立ち現れるのである。この跋文は朱熹自身の覚え書きとして書かれている。自身以外、読者として想定されるのは、親族及び未来の道学賛同者ということになるが、「恍然自失」の表現に、尹焞の心を捉えかつそれに一体化することがよく表現されている。

○第44条 太室・中峰の詩画に跋す（跋太室中峰詩画）

南康軍知事期に、朱熹は軍庁所蔵のいくつかの画巻を鑑

賞したことがある。本条はそのうちの一つで、中国で聖なる山とされる五岳のうちの中岳の太室山と中峰山嶺を描いた詩画卷をみての感慨である。陶淵明の一詩が書き込まれていたようである。なお、南康軍城の廬山の東南麓には陶淵明が遊んだ地の伝承があり、陶淵明好きの朱熹もその地を訪れ、小亭を建てて「帰去来館」と名づけ楽しんだとのことである。

この詩画卷に描かれる太室山と中峰の峰々を鑑賞し、羊〔松齡〕長史への送別として陶淵明翁が贈った詩を誦唱して、このため感じ入り、巻子をしまいながら大きくため息をついた「為之慨然、掩卷太息」。画の筆づかいの精密で奥深いこと、山の様子が雄大であることについては、「もとよりすばらしくて」あらためて評価するまでもない出来映えである。

淳熙庚子（七年）中夏（五月）七日（新曆一一八〇年六月一日）、わたくし朱熹・仲晦父が書きつける。

〔觀此卷二室諸峰、誦陶翁送羊長史詩、為之慨然、掩卷太息。至於画筆精深、山勢雄偉、不暇論也。〕
淳熙庚子中夏七日、朱熹仲晦父書。

ここに言う贈詩は、『陶淵明集』卷二「贈羊長史 松齡」のことである。南北朝の東晋末の義熙一三年（四一七）、後秦を亡ぼし長安に駐屯している劉裕（のちの宋の武帝）に対し、左將軍朱齡石が長史の羊松齡を派遣し祝辞を述べることになり、そのお役目を友人の陶淵明が言祝ぐというものである。詩は五言句二十四句、四句六連から成る。いささか乱暴なまとめながら大意を述べると、「①黃帝・舜の世界が後世からわかるのは古書による／②長安・洛陽にある賢聖の跡は（南北が分かれ）行きにくかった／③このたび南北一つとなり羊君は行くがわれは行けない／④四皓の商山で綺里季・甬里先生にご機嫌をおうかがいされよ／⑤御地は富貴による憂患なく貧賤にある楽しみ／⑥採芝の歌がここに響くはるか後世 ことば尽き気持を伝えられませんと」といった内容のものである。

陶淵明の詩自体は、劉裕と羊松齡を一方で言祝ぎつつも、他方、秦末の乱に隠れた四人の伝説の隠者「四皓」に関心がある。では、中岳の画を見つつその陶詩を朗誦し、朱熹はなぜここで「太息」するのか。ここまでの本稿の延長でいささか深読みしてみたい。

ここでの朱熹の心情を考えるには、まず彼らにとつての宋金戦争の記憶に思いを致す必要がある。先にみた「直節

堂記」の話のように、宋金戦争の記憶は士人たちにはまだ生々しく、今の任地のこの南康軍も荒らされた。北地の回復は淳熙の今（一一八〇年）もなお及ばない。陶詩は、一時的にせよ中原が回復されたところから詠われており、訪れられなかつた中原への想いは、詩の中では今や過去となつた心情である。だが朱熹にとつては、行けない処として北地を遠く望むというのが、目前の現況である。陶淵明らにとつての北地行きは制限は、第三連の劉裕の活躍によりほどけたが、中岳とそこにある、宋代の文化人なら皆が憧れる古文化は、南宋の朱熹らには実地に味わえる条件にはない。太室山、中峰山は、見るとすれば絵の中にしかありえない。陶の詩を読むと、中原行きが可能となつたその開放感と、それが不可能な南宋の今との相違が、対比的に浮かび上がる。その落差を思わせる詩が、太室山、中峰山にゆかりあるものとして朱熹の眼前の画にまさに書き込まれている。画巻に詩を書いた人は、「四皓」への懐いという陶詩が持つ隱遁志向を、古文化に関わる嵩山に読み込むべく書いたのかも知れない。しかし南宋の官人である朱熹からすれば、中岳の絵を見ながらこの陶詩を誦唱するときは、中原へ今や行けるといふ陶詩が語る思いと対比的に、宋金対峙という現在の状況への右のような思いが前面

に出てくるとみられる。「太息した」と跋文に書き込むのは、こういうことのためかと思われる。逆に言えば、「為之慨然、掩卷太息」の句により、本稿筆者は一読者として右記内容を考えざるをえず、この句がなくて「詩」を「誦し」ただけでは何も考えなかつたらう。「太息」とあることにより「太息」の理由を考えることにいざなわれるのである。

ただし、陶詩における四皓への思いに対する関心が朱熹にないかと言え、そうではあるまい。「中原の回復」、もしくは「中原は遠い」といった問題が書き込まれていても、それがもし陶淵明のものでなかつたなら、「慨然」としたり「太息」したりはしな思われる。陶詩の中に四皓への思いがあり、しかもそれがほかでもない陶淵明の詩であることが、政務に忙殺される朱熹の、政務から身を引きたいとの心を刺激していると考えられる。太室山、中峰山の古文化の地には行けない、かつ加えて、四皓に挨拶するようなことも夢のまた夢である。思いは複層のものとしてあらとみられる。

画巻は軍庁所蔵のものである。それに対する跋文における、複層の思いのこうした「太息」の表明は、単なる個人としてではなく、南宋に生きる官人が、時を越える士大夫文化世界に足場を置くといふところから発せられていると

言えるのではあるまいか。

むすびにかえて

朱熹の跋文を読む際に、従来やもすると「研究」に必要な情報を抽出する視線で読んでいたのに対し、跋文をそれ自体として読むことを筆者は本稿で提起し、そこから見える光景を、跋文における「感情」の表象という視点から論じた。ただし「感情」と言ってもその内容は個別には喜怒哀楽の多岐にわたるので、「感情を強く揺り動かされた」ことを表明する、「嘆・歎」とそれに関わる熟語、およびその熟語のうち「歎息」と重なる類縁の語「太息」について限定的に取り上げ、「心を揺り動かされた」と表明するその文脈を読み解き、「思想」の主張との距離などを、計六条の跋文にうかがった。

通覧して言うと、感情、情緒はもともとは身に貼りついている。これと対比的に、跋文対象に対する「評価」とか「思想」的主張の内容は、身に貼りつくのではなく公共的な拡がりを求める。内容を「説明する」ことは身に貼りついていては無効であり距離を置き客観化することが要請され、そのため思想の説明は感情とは一見、相入れない。し

かし常にそうかと言うとそうではない。内容の説明において距離が必要であるにしても、その内容を「主張する、強調する」という段において身に貼りついている感情、情緒をまじえることは、内容を発しているのがその語り手、すなわち外への主張というベクトルの発出点であることを明確化させることにおいて、ときに有効性が認められる。事例のうち、第36条「跋王枢密贈祁居之詩」、第44条「跋太室中峰詩画」はその例である。すべて情緒に流れると内容伝達がおろそかになり、効果ある主張にはならないが、身に貼りついているところという発出点を明確化させる効用をうまく使えば、感情を表現することも、「評価」とか「思想」的主張をするのに効果的な場合がある。朱熹は意識してこの効果を効かせているとみられる。

特に「太息」という語が、朱熹においてそういう効果を考えた使われ方をしているとみられるので、最後にひと言述べておきたい。この語は、「ため息」ないしは「ため息をついた」という意味の語であるが、生活の中では「ため息をついた」という言葉を眼前の人に向けて発することはふつうはしない。するのはため息をつく行為だけである。つまり「太息」の語は、あくまで制御された説明表現であり、行為そのものと説明表現との間に根本的な切れ目があ

る。しかし「太息（ため息した）」と書くと、身に貼りついた振る舞いだったものが他の術語と同等に「説明」の俎上にのる。読む者からすると、「ため息した」とあれば、そこにはため息をつく心情とその原因、及びため息の行為があつたことが予測させられる。そこに予測される事情や理由が合理的にみえる場合、読む者はわが身を同調させ、わが身がため息をつく気持ちにまずなり、わが身の内にその理由を感じようとする。「太息」はそういう効果を引き出す表現である。朱熹が「太息」を使用している文脈をこのような眼で見ると、まさに右のような効果を考えた文脈で「太息」しているように思われる。そのように言葉を制御して表象するものとして、跋文という場を朱熹はみていると思われる。

以上は、「嘆・歎」とそれに関わる熟語や類縁の「太息」という、感情の限られたあらわしからみた朱熹跋文の読み解きである。跋文は従来、あまり手がつけられていない資料なので、視点の設定により様々に読み解けるはずである。また、蘇軾の跋文や南宋人の跋文との比較による同異などに検討を拡大すると、跋文を通してみる士大夫の文化意識・美意識といったような領域が具体的に立ち現れる。読解に

は手間がかかるが、跋文資料は、調べをきちんと行えば肩肘はらずに多角的に楽しめ、中国近世士大夫文化と思想文化研究にとって、今後、開拓が展望できる沃野であると言えよう。

注

- (1) 拙稿「朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿」(二) (十九) (東洋古典学研究) 第二十集、二〇〇五年 (第四十二集、二〇一六年)。
- (2) 詩や葬祭・哀悼文以外についても、「感情」との親和性を考えてみよう。朱熹の文集にある「書簡」の言葉は、相手の言葉を前提とした応答型の表現をとり、「説明」中心の理知的なものが中心だが、宛て人との関係の遠近により、感情が比較的生まのかたちで吐露されることもある。書簡に含まれる情報の扱いについては、拙著『朱熹門人集団形成の研究』(創文社、二〇〇二年)「序説」、参照。ただしこの書では「感情」は研究対象領域には入っていない。「論説」の言葉は、論じる内容を客観化して「説明」することに努める。感情は基本的には入ってこない。「上奏文」等公用文の言葉は、君を尊重し臣として謙讓する枠の中で語る。方向が定型的であり、感情が入るにしても、この定型枠に押し込み制御されたものとなる。「伝記」資料等の言葉も、方向が定型的で対象人物を顕彰するという枠から制御された言葉となる。

四書その他への「注釈」の言葉は、注釈対象の本文の文や語句に対して何らかの問題を立ててその解答を説くというしくみのものであり、「説明」の言葉とならざるを得ない。ただしその言葉は、実践への促しをときに内包しており、注釈の「説明」として完結するものではない。朱熹の四書注釈の表現の、言葉としての特質については、拙稿「朱熹における四書注釈の「説明」と実践知の所在」（『中国思想史研究』第号、二〇一八年）、「朱熹の四書注釈における「解説」的言辞の特質とその形成」（『東洋古典学研究』第三十二集、二〇一一年）、参照。以上、作成の際にはその特質に沿って読み解く必要がある。

(3) 以下の朱熹跋文の読み方論は、注(1)拙稿「訳注稿(一)」(『東洋古典学研究』第二十集、二〇〇五年)「はじめに」の一六五、六頁と記述が重なる。

(4) 朱熹跋文中の「嘆・歎」「嘆息」「太息」や類縁する語の出現様態について述べると、巻八一については、本稿末に附録として、「朱文公文集」巻八十一跋文「一覽表」を提示した(注(1))、「訳注稿(十九)」末尾「巻八一 一覽表」を簡略化したもの。表の下部にこれらの語の使用様態を示した。朱熹以外が「歎・嘆」じているのを除き、六十一条中、「嘆・歎」関係(「嘆息・歎息」も含む)が十条、「太息」は七条に出る。重なりが第51条に一条

ある。重なりがある跋文は思いが強いことが示唆される。本稿本文では、類縁の語として「自失」を一箇所とりあげた(後述)。この語は跋文に他には出てこない。以下、巻八二では七十七条中、「嘆・歎」関係が十四条、「太息」が七条に出る。重なりはない。巻八三では六十七条中、「嘆・歎」関係が十八条、「太息」が六条に出る。重なりが二条ある。巻八四では七十五条中、「嘆・歎」関係が十八条、「太息」が六条に出る。重なりが一条ある。なお、「太息」は、跋文で意識して特に使用する特殊な語とみられる。後述「むすびにかえて」、参照。

(5) 講演では、福建北部の地縁・血縁・学縁の人網の中で朱熹が暮らしている様子がよくわかる例として第7条「跋方伯謨家藏胡文定公帖」を取り上げたが、紙幅の関係で本稿では略する。

(6) 書文字に対する朱熹の評価基準とその文化的意味について論じたものに、津坂貞政「書法観賞の場からみた南宋朱熹の美意識」(宋代史研究会編『中国伝統社会への視角』汲古書院、二〇一五年)がある。この論考は、本稿の朱熹跋文資料を効果的に活用した論考となっている。

(7) 「通書」と「太極図・太極図説」がともに程氏を経由するという論は、北宋末南宋初の祁寛の「通書後跋」(『周子全書』通行本、及び『元公周先生濂溪集』巻四の通書の付録に現在収載)に、「通書は即ち其の著す所なり。始め程門の侯師聖より出で、之を荆

名がみえ、南康軍赴任以来、朱熹は複数回、当地でこの人に会っていることが確かめられる。

(9) 私事になるが、一九八七年一〇月末のある一日、本稿筆者は、中岳廟、嵩岳寺塔、少林寺、嵩陽書院等、この中岳山嶺山麓の古跡をめぐった。

(10) 本跋文卷八一第55条「顔魯公（真卿）の栗里詩に跋す」、参照。

(11) 詩の原文を四句ごとに示すと左記のようである。

愚生三季後／慨然念黃虞／得知千載外／正頼古人書
賢聖留餘跡／事事在中都／豈忘游心目／關河不可踰
九域甫已一／逝將理舟輿／聞君當先邁／負病不獲俱
路若經商山／爲我少躊躇／多謝綺與用／精爽今何如
紫芝誰復採／深谷久應蕪／駟馬無賞患／貧賤有交娛
清謠結心曲／人乖運見疎／擁懷累代下／言盡意不舒

〔キーワード〕 朱熹、跋文、感情、南宋、士大夫文化

☆『朱文公文集』卷八十一 跋文一（知南康軍退任前後まで） 一覽表

※回は訳注稿の掲載回。跋文対象は詩文・画・書物に分け印を振る。詩文の○は真筆、◎は朱熹自筆、書物の◎は自編著。表の下部に、「嘆・嘆息・太息」等の表現の所在の条を示す。ゴシック体文字の題目は本稿でとりあげたもの。

回数	題目	年	月	季節	歳	朱熹の所在	機縁	跋文対象	書物	嘆	嘆息
1	朱（光庭）給事の奏劄に跋す	隆興1	1	1	34	崇安か		詩文（書） 劄子△		歎	
2	陳了翁（瑾）兄に与ふるの書に跋す	2	10		35	鉛山か		書簡○			
3	胡文定（安国）公の詩に跋す	乾道1	11		36	崇安か		詩（胡寅筆・拓） 書簡○			
4	張敬夫（栻）書する所の城南書院の詩に跋す	淳熙1	秋		45	崇安か		詩○			
5	胡五峰（宏）の詩に跋す	隆興1以降				崇安か		詩卷○			
6	張魏公（浚）了賢の為に仏号を書するに跋す	乾道3	12		38	豫章		仏号書○（張浚筆） 書簡○			歎息
7	方伯謨（士繇）家藏の胡文定公の帖に跋す	8	12		43	崇安		書簡○			
8	劉平甫（珣）家藏の胡文定（安国）公の帖に跋す	9	2		44	崇安		書簡○			
9	屏山（劉子翬）先生文集の後に書す	9	7		44	崇安		劉珣			
10	張敬夫（栻）石子重（塾）の為に作る伝心閣の銘に跋す	9?	?			崇安か		石塾 銘○?（張栻筆）			
11	古今家祭祀に跋す	淳熙1	5		45	崇安か		（自編）			
12	近思録の後に書す	2	5		46	建陽		呂祖謙		歎	
13	通鑑紀事本末に跋す	2	7		46	建陽		袁枢			太息
14	和静先生（尹焞）の遺墨の後に書す	3	3		47	崇安か		趙焯 尹焞遺墨 （模刻・拓）		自失	
15	張公予（珪）の竹溪詩に跋す	3	5		47	婺源		張珍卿		咏嘆	
16	劉元城（安世）の言行録に跋す	3?	?			崇安か		妻の死?		嘆	
17	大学の後に記す	1?	?			崇安か		（自編）			
18	中庸の後に書す	1?	?			崇安か		（自編）			

19		18		17		16		15		14										
61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
周子『通書』の後に記す	陳徽猷(璿)の墓誌銘の後に記す	劉子澄(清之)編む所の曾子の後に記す	鄭景望(伯熊) 呂正猷(公著) 公の	鄭景元(伯英)の簡に跋す	張魏公(浚) 劉氏(子羽・子翬・珙)に 与ふるの帖に跋す	顏魯公(真卿)の栗里詩に跋す 白鹿洞書堂講義の後に跋す	金溪の陸(九淵) 主簿の	南上人の詩に跋す	蘇聘君庠の帖に跋す	陳簡齋(与義)の帖に跋す	張巨山(嶼)の帖に跋す	白鹿洞藏する所の漢書に跋す	洪芻の作る所の靖節祠の記に跋す	独孤及楊賁処士に答ふるの書に跋す	免解せらる張克明の啓に跋す	語孟要義の序の後に書す	太室中峰の詩画に跋す	冰解の図に跋す	歐陽文忠(修) 公の帖に跋す	洛神の賦の図に題す
14	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8?	7?	7?	7?	7	7	7	7	7	7	7
9	11	9	8	8	8	7	2	3	1	4				12	11	5	5	5	5	5
58	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52				51	51	51	51	51	51	51
崇安か	建陽	崇安か	崇安か	崇安か	崇安	崇安か	星子	星子	星子	崇安か	崇安か	星子	星子	星子	星子	星子	星子	星子	星子	星子
(自編)	陳坦	劉清之	趙彥真	鄭伯英	劉珣	陳準	陸九淵	志南上人	志南上人			劉仁季		張克明	黃灝	軍庁所蔵	軍庁所蔵	軍庁所蔵	軍庁所蔵	軍庁所蔵
	墓誌銘○ (汪応辰筆)		文 (鄭伯熊筆・模刻)	書簡○	書帖○	詩○(朱筆)	講義稿○ (陸筆?)	(詩卷の) 書帖○	書帖○	(詩の) 書帖○	書帖○	記	書簡	書簡○	詩画卷	○	○	○	○	○
	◎	○									○			◎						
									慨嘆	嘆					太息		太息			